

今、若者たちへ

次世代に贈るメッセージ

日鉱金属社長 岡田 昌徳さん

「仕事に男らしさを感じて今の会社に入りました」と語る日鉱金属の岡田昌徳社長。金属事業と石油事業を中核に展開する新日鉱グループで同社は銅のトップメーカーであり、海外で鉱山開発を積極的に進めるグローバル企業として知られる。一貫して営業畑で経験を積んできたという岡田社長に次代を担う若者たちへの期待などを語ってもらった。

先輩の背中 見て育つ

学生時代は応援部に所属し、主将を務めるなどいわゆるバンカラな学生生活を送っていました。そんなわけで卒業後の進路を決めるに際しては、やはり「男らしくたくましい仕事」にあこがれました。就職活動で当時の日本鉱業（現新日鉱ホールディングス）を訪問したのですが、鉱山会社ということで大変男くささを感じ、その場でこの会社に入ろうと決めて即採用の内定をもらったというのが就職の経緯です。もちろん、女性社員も活躍しています（笑い）。

私は四人兄弟の末っ子で上の三人はすべて女です。その中で育ったものから、子ども時分から男っ気にはこだわっていました。若いときに男らしさを求めたのは、今から考えるとこの家族環境が大きく影響したのではないかと思います（笑い）。

当社は現在、新日鉱グループで金属事業を担う総合非鉄メーカーとして①資源（鉱山）開発②銅の製錬③銅箔（はく）などIT（情報技術）機器向けの各種素材の製造・販売④銅・貴金属やレアメタルのリサイクル——の四つを事業の柱にしています。入社後二年半、大分県の佐賀関製錬所で銅製錬の現場を経験し、その後銅地金の営業部

どんな環境の中でも課題や目標を定め その達成感を得る努力が大切

門に配属されました。その時に仕えた先輩上司の二人は物の考え方が非常に明快で仕事の進め方や問題発生時の対処法などをいろいろ教わりました。最近先輩の背中を見て仕事を覚えるといったことも昔ほどではないようですが、私は四年半にわたって先輩にくっついて仕事に打ち込みました。いま考えると、この出会いは私にとって社会人として一本立ちする大きな転機になりました。

世界の銅市場を動かしているのは英国のロンドン金属取引所（LME）です。銅担当の私は国内で四年半、営業を担当した後、勉強のために初めてロンドンに海外赴任しました。語学面などで大変苦労しましたが、この時の経験は自信になりました。その後はIT機器向けに供給する電子材料製品の銅箔やリードフレームの事業で合併会社の設立や買収・整理などに参画しましたが、これも苦労の連続でした。これら諸懸案の処理ではロンドンでの海外生活の経験が役立ったと思っています。

好きな言葉に「大事は理をもって決し、小事は情をもって処す」というのがあります。例えば大きな改革を断行する場合、これは理を優先して決めざるを得ません。しかし、これに伴う個々の案件については情を加味して対処することが大事だという意味です。この



アメリカ出張時に現地従業員宅で歓談する岡田社長

広い視野から 世界を知る

当社は今、国際企業として南米のチリやペルーで鉱山開発を進めています。北米やアジア、ヨーロッパには工場も展開し、現地で多くの若者を採用しています。私の目から見ると総じて外国の若者はハングリー精神が旺盛で大変たくましいと感じます。競争することに慣れており、よく勉強もしています。

本格的なグローバル時代を迎え、日本の若者はこうしたハングリーな人たちが今後戦っていくことになると思います。今の若者は結構口ではいろいろ言いますが、引っ込み思案な人が多い気がします。私はロンドンに赴任以来、数え切れないほど外国に行っていますが、海外に出るとずいぶん物の見方が変わります。外から見るとこれまで気づかなかった日本の良いところや悪いところが初めて分かったりします。国際的な視野を広げる上からも若者にはぜひ海外へ出て自分の目と足と口でいろいろと見聞・経験することを大いに勧めたいと思います。

会社生活で悔いのない人生を送るには小さな仕事でも目標を持って達成感を得ることが大事です。この達成感がないとなかなか前には進めません。どんな環境の中でも自ら課題や目標を定め、その達成に向け、強い意志をもって、粘り強く取り組むことができる精神的にもタフな人材が今後ますます必要と考えています。



おかだ・まさのり 1970年一橋大学経済学部卒、日本鉱業（現新日鉱ホールディングス）入社。2001年ジャパンエナジー執行役員電子材料部門長、02年日鉱マテリアルズ社長を経て05年6月から現職

広告

企画・制作
日本経済新聞社広告局